

繡像
復讐

山石見英雄錄

四
輯

四

遠
2509
33-25



遠
2509
巻 35-25

繪本復讐英雄録四篇卷之四

洛外らくがいの山路さんぢ小杜せうとと三光さんみつと相あり

湖西こせいの村莊そんさう小次郎せじろうと後ごと教しやくと

小次郎せじろうと極松ごくしょう庄しょう光みつ也や村むら去さ後ご蔭かげか送おく別べつ磯いその志し介けい

小次郎せじろうと極松ごくしょう庄しょう光みつ也や村むら去さ後ご蔭かげか送おく別べつ磯いその志し介けい

こころの英えい客かくをくくなりなりううるるああきき月つきとままぐぐ云い做し一いつ路ぢ

傍わらわの茶ちや所しよと人ひと小せう烟えんううるる小せう異いううりりしし又また酒しゆ後ごののせせととて

口くち濁じやくとてとて遠えん難なんををれれをを蓋ふた着き置おきき又また茶ちや店てんののままとと又また漸ぜん

と入いるるああききととええつつとと志し体ていををひひくく又また茶ちや店てんのの志し光みつ也やをを執しやく視し

て刀たう祿ろくのの内うち風かぜ海うみ浪なみをを東あづまのの山やま百ひゃくとと見み集あつりりととああぬぬ変へんてて却かへ

よりぬぬああききううるる小せう遠えん里りよりより路ぢののままくくももあありり糸いとどどととああるるけけ

復讐英雄録四篇卷之四

甲辰の暮りて明日こそよりのめし 往年 八月 又 宝町
 市所の上より 義経 石をとりありしより 三歳に乘越え云方
 家清屋を放後 家三好殿 四品 隆長 隆景 の控付より政を
 執る 畿内と信めんとせしるも 執もされど 吾心不矣
 後ありて 念切きわりの多きれども 洛の中 亦知悉しと
 世りろまは 疾路と 采行あり 洛に 勇健の長やあらん
 惣まは 咱們が 舗おも 目今 時候より 洛東の人 亦希 敵の
 りと 做るて 申くも 敵へ 向ふと 有様 又 山城へ 玉の
 橋の 途えれど 迎に 之 敵の 心 志 變り 又 志 變り 浦 へ あり 殊
 ども 小浜の 夜に 控せど 遠里 爲り 城の 憂 へ 是 況 況 況 況
 們的 衆しと 此の ため 思 慮 する こと 多く に 著 しく 傳 へ たり と

敵んと今と初て 在し うち 山 牙の 終り たり ぞ とも 思 慮 あり
 と さま 異ふ 者 あり と 莊 々 打 撃 び 吾 偏も 徳 小 備 あり 又 刀
 介し 成 又 是 なる 故 令 ら せ れ び 心 安 かり 甲 辰 月 と 改 り
 傳 へ たり 初 行 ん の こと 是 して 是 又 義 兵 たり 新 打 傳 へ
 て 在 たり 又 大 伴 上 り 如 雲 如 月 又 尾 末 り ぬ 橋 尾 杉 本 赤
 堀 時 廣 及 び 天 山 高 志 本 丸 穴 左 春 石 墨 野 金 谷 徳 有 子
 光 然 が 幕 布 下 へ 一 と 記 あり 終 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ
 惟 時 又 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ 傳 へ
 是 へ 之 初 とも 是 と 是 へ 之 初 とも 是 へ 之 初 とも 是 へ 之 初 とも
 重 一 初 とも 是 へ 之 初 とも 是 へ 之 初 とも 是 へ 之 初 とも 是 へ 之 初 とも
 山 崎 の 人 控 へ 尾 上 と 記 あり 松 風 又 伴 上 りの 記 傳 へ 傳 へ 傳 へ

於中待女の役藏中もさぐりたる夏の夜なぬらぬらと
 お逢へぬのてさぐり没も果ぬる日の思の流し流し來り
 そも遠里の南の御軍家とさぐり少の岩倉山ふ連て待せり
 深山はあつねども新くしての征客の多く旅人足賣の山
 城は老名那とて岩より粟田口と越く跡上の里へ
 十八丁より跡とより西の方八丁計ありて京三條橋ふ
 列りててい江州唐崎より四里よりありて今も
 おまも面付の意にも來百年より打續とさる礼世も
 さへ廣く兵火もかまらぬありて流し流しの荒涼と
 惨光景悲慘ぬへ一困憐の体致候況極松光朝の生並
 びり松林を一町餘り新とて去向ふ友系も深く生茂

さるおありは懐しむと遠里下の澤と虫の音多り
 にそ新田あろの源のそ寂寥とてありて山登ひろ
 幸うまの余所ふ唱言ふ打孫まで居たの士なり
 なくもさる方寸おふ物さびか耳も徳と勇士の中
 性天飛鳥の列と礼し群と啼出の聲さぬの煙後兵有
 との兵書の要云るものとして吃と祝きれを強くと
 携りて一箇の教書ふ然とて服と死り向來路と
 まは遠亦回月下と仲と教氣の風氣とあ後ふ記
 どおともおぬ不敵の光朝と結び山家も
 蕭々なりとも都の芭ふ八重荊刺荊もさるて
 独吟と找ひて流し目途と松蔭の風とに秋と菅

芽叢より露を穿て穿るる四個の櫃櫃見各面成霞及びり名
 若もせひば何者とも自刃と奔りて被連て路を度りて
 一夢叫ぶと暗歸りや宵後の方にも亦三名跳り出つて
 をと来る仇と登るるも精き光物おそと度る汝等々
 旁徑の賊と名ひいり面の霞せど形容さ人教も合らり七
 名の武士成坊の一掃うらん試撃の自後たまに良言
 と翼け其邪と懲て勇まふ款て死んより志を改め淋と殊
 して世ふ功ある人とならざや白痴們と罵りながらも流
 と今言耳も入ぞ去向の四個世賢總は皆さうり既小
 汝が知ることく往日より穢面ちる意なき盛名新道遠
 親の世よりをいぬを能あふの極ど地方にち苗字も由縁

ある元を流有るよ知るは「今若者事何事も是く乃
 獲者うろぞ其を是務負の時の遠化坂かそ吾們が思
 らば不覚と合年うらん汝が僥倖なり木刀ふ矢なる白刃
 乃鋒武士の志の務負の是なり其と忍まてや私
 木の浦へ海へ船中吾輩と病よ上せく進まらざと其
 逃る食税さんや是燈とせよと頼誰と何くと冷野の我
 本事と云知なぐら頼誰と何くと冷野の我
 の脱味試まると太刀の鞘打と放閑一捧甘ぐ写もなく
 赤堀主給橋尾堅お天山双四所法彦又右に找まら
 逼券より子四方より姻因と聲んと競ふ七口の割の山よ
 瑞る如小松ま那くぞ足へこまつ悠りまれども光物い毫も

夏九英推集四編卷之四

四



復九英雄録四編卷之四

五

植松勇を
奪ひ去
日岡山に
斬る
三克成

天山双四郎

石五郎



復九英雄録四編卷之四

六

莊兵衛光朝

岡聖三六

屋を以て三尺二寸の足への利刃疾く流し籠と杖杖一揮
 閃うと地上の電中天の光りも映ふ月の影湧る拳の脛練
 の刃尖お後より南りたちと掃ふ奮勇刀敵互に呼波殺
 い夜山のまゝは頭へ空も高く丁く撲地と聲遠へまゝ
 打合をと彈响の南夏ちびり南殺の金鉄もろ鳴林の響は
 激して鼻に冷しと七光一槍勝負と良敵又変りんと其妙
 秘術と獨りなる音如性の疎らまど遠那者法園と響
 坂を越西を降りも地方ふ知しは「糧者勇士執る疎肉の
 あじとあへど一毒こそありま盡るゝあふ古金谷たむ四小
 既う子彼は浅疾と負めまば大敵を被合せ途は勵
 聖く被て殺入忌野が刃と舌擦と受くら光射の海を磨

せき流しも敵を二六が双術拂く難倒し後方小逼る
 羞る右の肩先乳のりまで破落籠とんと所別が若
 叫んでお人ともあ後へ挫と外まじり光射急勇とあひ
 砂汰のみ名も血ぞと呼吸りて聲靡ける跪き力とせと
 交へ難うるたむは所刃と殿と打落さまむと又小細刃丁
 と所殺さきて血煙の忽ち赤く深る身と作ぞしてぞ外
 ろ「殺又殺立ちしは」満有言をいつるも交方り打成時廣
 四們も疾と負めと捷みして聲送し倍と打毒の赤と
 投て血をさき盡し悪共盡きりるせとと光射の血刀揮
 て響り敵は向糸上の山路と烈風のどく趁掛まば有種慣
 幸らる檻檢們殺ま難うる火造の書計四名各が發た右の

君きみは蕙けいより月つき臨勝りんしょうちる樹下じゆ闇やみ小使せうし侍しやうと新あらたと標しらと控ひかと
 不ふれ小せう字じ身みよての輝あきらみ御ご手てにあはれぬととにに抱かかりてしら
 ども実み秀しゆ寂じやく寂じやくの返かへべりうととと独ひとり生まつたら又またの血ち押おりて新あら
 小せう納なめく被お埃あ拂はりて遠とほ方かたへ立た成なりの短みづ夏なつの表あらはしる直ちよく
 下した既す不二ふたふた交まじ途ぢうさばりりと光あき然らいまも死に中なでは嘔お吐ひるはむを
 ととぬりは素す同どうく事ことの顔かほ未ま紅くわうととをを苦く痛う又また堪たむや及およば
 と物ものに吐つ息いきのあまきりもせせなく告つぐ情じやう由ゆ系けい尾び指さ尾び監かん扱あ
 と赤あか坂さか時とき廣ひろが主しゆ深ふかくそ天あま山やま双さう門もん所しよも是こゝ小せう要ようの凶あつ首くびなり
 少せう小せう監かん物ぶつ形かたち威いの旧ふる成なり成なり大だい学がく盈えい純じゆんととははなす赤あか坂さかが旧ふる名なの
 廣ひろ赤あか軍ぐん志しの折ま世よ是こゝなり天山あまやま山やまととも大だい川がわ八は丈ぢやうのく座ざとて
 同どうくく筑つ紫し名な鷹たかの信しん家かは仕しへへらら同どう條じやう岩いわ足あし公こう甲がわととなる

こゝこゝああてて殺ころ害がい一いっそれそれより退たい後こうををららばら那なムム甲がわ子こひひ重ちゆう
 ちち原げん色しき差さととははなす先さきをを所しよ自じらら名なをを殺ころ害がいとと交ますますす一いっのつみみ
 りり群ぐん小せう者しや一いっ壯さう士しありあり直ちよく時ときのつ武ぶ者しや修しゆ小せう出しゅつくくををざざりりと
 りり中ちゆう傳でんままはは遠とほ三さん個こ身みはは竟けい有あるるをを防ぼうんんとと各かく園えんとと經きやうるる中ちゆうに
 方かた僅げんををらら完げんをを初はつめめ遠とほ里りはは整せいれれ一いっ個こ令れい各かく各かく處ぢよ不ふ及およば
 俺おん們んととままををてて好このとと結むすぶぶ死し生せいとと修しゆふふすすとととと抱あかかりり申まへ
 我われもも情じやうららくく俺おん們んがが痛いた疾やくとと負おつつ致し没ぼつせせとともも敵てきもも只ただ恨うらみ
 ととがが敵てきのの輝あきらみ御ご手てにあはれぬととにに抱かかりてしら
 秘ひがが秘ひつつささへへ少せうくく涙なみだりりをを白しろくくとと女にとと擇たくむむ
 更まりりししそのそのああららとと敵てきりりももままささ不ふ信しんのの次つぎとと踏ふみみ十じゅう
 歩ほ百ひゃく歩ふのの似に遊ゆうはは堪たむむとと冷ひや笑わらむむ莊しやう々々傷きずのの傷きずはは要えいちちととたたむむ

なぐり赤松のつらまは性田悪少うらに爪深き一我使の本
 性実又悪くても彼あり那奴們うまきもまぶまを免れ
 走りの天を命を彼岩刃の氏の子に殺せん遣化の子
 隙り料り難うり俺若し他日その岩刃氏小まきうみわの臂
 の力と竭して那兇徒と屠んものごとひさうは肚裏小ぢい
 儘くみぶさうらう細が足と捷めく二十丁弱のたを
 跡との里まむりたたして里長の家をもひて先偏が
 姓名来歴を問約く速強り扱遠よりと告海「即時小
 死る者二名うちまごも海浜ちう一名の十く滅を利
 ど後の保徹の興よ生措ぬ急ぎ友應へ折へありはし
 別の遠致は宿りくそ裁と納んにお舎とる余あそんと

書ふ主人の極松が威風や也まきん令ふりつひぬ後ま
 遠里のそ村うて細客を留め小極めく後返勿海友
 府への遠方より折へせし今八丁許折あり三條の橋小
 て飯店多くあり那知ま宿りあはし此歌店まで局
 道小僕と隸々んと陽は情と本くても海は宿折と
 恐措どい告海の時又後悪くと思ひまきるものうら
 余の光然の里長小謝し尋ね「隸奴又修して出た
 しが経うく三條の橋を打後り歌店を喚起て者りと
 乞に跡との里長よりまきりみるまの夜まうらあまきと使
 く諾ひるまは僕の慣し路ちうとてそ修拜して路り
 恐く光然の車らう途中の一峰と後飯家の同往極し

出所せん歌后の婢不囑まゝ、階居らるる人と相ま同
 江雁の所を同且出所のことと傳りける人差へる所
 夜園くわ那知の牧置も悪まれば、明の海へ出させあふた
 懐いあはじとつらまき理もあんとて羅まらるるが熟思ふ
 殺身偏しめり赤橋橋尾天山穴を為我と寛ひ移んと
 して志と逆ど却て修伴と三名まぐ喪ひぬまふ固不
 良徒ちり怒を遷して村松及伊後とも怒を害を倣ふ
 為りぐに非除今宵の渠們幸橋坂へ却くともたふす
 男小平魚ぬべらまふ幸あまじらまども其日こそ焦急
 一終のま今我影獲影知と圖を幸橋へ却るる時定
 ちまふ連く書翰と村松は贈く情由と報せ戒信させ

んふの如くく抑りひまるの勢起く尚於餐さへ調へぬ
 男小平表をせし書翰と對し又も逆接する人と相て
 この一封の急御ふ小託くはあ幸橋矮くの象へ書らるる
 快く針くひあたまと儼法をも同く修ま遷らるるを
 ひと主人の接り返りらる有右而於餐もろぬまひ光於
 い簿の所由と海へ出んと結果もろおそあま略衣衣
 ころ幸幸十回又名破乱くくと網入りつ後於雁の序後らる
 ぞく一舟く彼ら勢の下あま找し二名の伏若撲地と擧
 入十人の老小身と沈まらる極松の支御擧らるあひ
 の掙さ左太よとあく惱らるる處を傳らると一個の力
 士繼んと寄せよせもまどと統致極ぐ引彼を續く伏子

が狗たの狗のごくに投てりま打累りて平張ぐもる前
 競ひ来る者們と投伏踏仆を修練精妙白打の秘術不
 振平張さまに秘蔵てん克と修り伏子們准後を一振振揮
 棒ちんごとを閃く一吐と嘯て群衆を物ともせむる先然の
 腰ちり刀振取一撃拂ちる春の河つ刃の脱物決展る
 後振振際り水も流るん所動るを率に各遠逃せし
 後方より窺ひ得捕役の致人こそは何打格ぞ八歩及の
 發聲並に細標の薙も臆盾張袴の上不信濃麻の陣外套
 とうち振と苛げらるる刃を濁ちる横へる怒の猛者勢
 震りせむ、中とき流浪人植松莊多樹よく兼りま汝昨
 夜日圓の山路うて甲乙三人と殺傷し候へ也と跡上

の置老ふ若ふしとあは遠里又来く宿りし地置老ふの
 その夜の中は海平ふ今物及ぶを汝が海へおるん甚
 緩急の面りて青沖不審の旨ある旨控来まよとのほ後
 と兼り後修家三老 穀樹 の跡へたる三好日向智老總主
 の老當ふ若者ありとん少も知らばや凡鳥多九所連致
 が對あつる不極款さるん不款奴を胸頂て席よ着て拜
 鞠一ち力刀と指出して後修家一系うご中と罵修る控
 威又厚く打ぬ浪人ちる某甲の下野結城の支流
 言馬解ちるまど結城の強舎持氏較長の時射より園東の
 八家 千桑 小山 里見 老林 小田 とて京邦の田藏 家 一色 修 小
 比せしは 是陸へちり以るい後修家の隣に居ちる某

三光の流ハ三好家の山後見とて京畿の政權を執り
 まさり有為ハ三好家の即ち今日のお家後継まで有
 ろるものと人も同ざる系家の諸統昔の紐ハ今の業カ
 門地自負で身と悔り及まばうて後する悔をく悔を
 つ快楽とまよく促して伏兵小目とめて急を急
 と囲もて急ぎ方に不知軍商の因経歴へこれより急を急
 たりまて急な悲致と光の体と急を急と急なる話分
 有致叔も本日辛疾なる村松が扁紙へ急より脚力下
 晡時候に控松が書紙とて持来より遠個御力ハ三
 本助と急做し男なるが二本と酒と刑も急なる急急
 性酷く酒を好めるをもく今日急と急なる急の急なりし

三光の流ハ三好家の山後見とて京畿の政權を執り
 まさり有為ハ三好家の即ち今日のお家後継まで有
 ろるものと人も同ざる系家の諸統昔の紐ハ今の業カ
 門地自負で身と悔り及まばうて後する悔をく悔を
 つ快楽とまよく促して伏兵小目とめて急を急
 と囲もて急ぎ方に不知軍商の因経歴へこれより急を急
 たりまて急な悲致と光の体と急を急と急なる話分
 有致叔も本日辛疾なる村松が扁紙へ急より脚力下
 晡時候に控松が書紙とて持来より遠個御力ハ三
 本助と急做し男なるが二本と酒と刑も急なる急急
 性酷く酒を好めるをもく今日急と急なる急の急なりし



さんわろよ大けつくほぬ者を遊んとして酒店へ入て
 時務をとほらう竹俵の研削まで熟睡せしむる
 醒く遠く立出つ方僅かよ来りし今清を交ひ光
 然が書翰を扱き固く一回の張きまき一回の光然が武
 勇と友恒の形と厚きを威下長江とほげ遠所由と
 承して修一高野歌をうらうる務く光然への書書と
 写り脚方少能く速読せりぬほく茂蔭のけ一件の簿と
 急ぎ建致者明及我子清三所りも告報せん小且進く
 俵殿大人小若く高屋さんと遠く一安んとせしうたふ
 右の極松がその心又收束まい又更ふ一封の書翰を作り
 且筒よ光然が輝して紙け措し三封の金よ又若年と増

加へて書函小納め扱後心の家練漢七が兄小実作とく
 る事に後房をきと老実者と扱き寄助房をうら今より
 進ふ事よよりほくの如く到り箇極く以計らふと
 仔細く要事を言合め今より紙の程うく善ん夜路の
 小心杜威僕曰み名を練一としてその准依まきまら計
 らひてそそ出しきりそ身も淫果の時候坂向へ都くは海
 ら芳盛さるんと一個の浪者よ挑灯持を出りそら中がて
 俵殿が家よ取り件の簿の類末と簿程あはりつと思ふ
 中よと彈つよ漏燈も打發と互の互義を去候もらく
 堂目の親音ちく急使と以建致氏ふけりしと報まじ又
 為光が門生一友名と都へまらう極松と傍せ那紙の家

子とも寛のきんとお憚ぬ既にして張燭時候は途々
 茂蔭の若別つ起んと千々を満経押寄は急ぎ付磨
 忘まのりや筋は松松氏遠里より海より急ぎ「主時の
 調査」若りどお夕日岡の椿事ありと況や「急ぎ」悪
 老と「階み」あら「松松氏」の厚意の音信は今日の
 かり実毒悪の彼們うまの備も怒と遷さん「松松氏」
 体ハ来「松松氏」知「松松氏」の先「松松氏」
 今の「松松氏」の「松松氏」甲夜うま「松松氏」
 まへ今「松松氏」の「松松氏」天晴「松松氏」
 貴さん小「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」
 こそ要「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」

似げらうとて登用をと教諭を難さまで「松松氏」
 青の月下の清談先生の「松松氏」は「松松氏」
 名「松松氏」返して「松松氏」の「松松氏」
 と「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」
 終「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」
 こそ「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」
 して「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」
 月の「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」
 況「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」
 時「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」
 と「松松氏」の「松松氏」の「松松氏」

所を金若左衛門前へ即射小撃きて命を潰し同所
 三つも死生れ知れど斫外されしより力なく曰名懸きて
 たたの山は分入つ路もなきおと辿りて潜ぶを遂しつた
 右へ一雨復懸ひしが穴を浚有の糸を受ちる者穴
 ちより半一人して至致る所お徹あるをりつく酒肴が
 案固して終夜辿りて那果と都くに天明と徹くそ家
 又到り樹よく湯作へ本日遠里に憩くひ疲まを隠しけ
 ろが煮て身の解開は材松清を交伴後且と殺して去る
 んとお後り腫れも早くも又山を出行し終る春樹の
 幸崎に暮りて材松と結果て後伴後と撃じと憐し合せけ
 まいども伴後の角は御疾のまご寝り果ぞと嘆ば其名を

ぞ一旦滞留の折畧そそ家の案内も知つたまは撃に執
 ろくくが材松が宿所ふ在る在る交難くり意懸きてり
 宿子と知ん便宜もぐる路傍の樹陰へ行立其さうこ
 らおれうに水の方より遠路を投て来る挑灯の光を
 ろぞお視懸しと曰名も所徑の方へまご探と遣はし尚
 も問查よろうるとも目送り居り中うも楯尾松成へ人こ心
 着ありぞや那挑灯の花舞の確ふ松葉斜角の中は若の
 葉ちりしとるるり性目惚し材松清三所り賊章とるる
 らど世うの同さ花舞もまうれど彼奴倘材松が僕たるは
 瞞く那奴の危実と探るま宣し然も俺們的言辭の
 音は地々の客と著しこれに彼懸し一穴を生の不將幼

時の郷語の今も竹書あまをいりて彼小輝及て誘め
 とく又海急満有の那挑灯と標として走り「が」一重
 時ありて立寄りさも矢一げ又造化妙く彼奴の果して村松
 が僕うていかに糸の堅田四下の者所要みそ村松王に
 対面の典よ来りぬ主の宿所よ在とらと欺りに固より誘
 ら下司の智恵徳くはとていと懈纏が完うて着月の磯
 して茂蔭が止着し及び今宵那処うの一支個の美業
 とその他いそ甲斐うと奴婢們うて着まる門人おもらさ
 也と穿鑿海なる板と告るは底皆大は鉄び急めか
 け回の首尾こそ済纏と様玄一挙よ彼奴們と結果ん小
 時為碇く登りり餘は律と強どと北と投てそ約まる

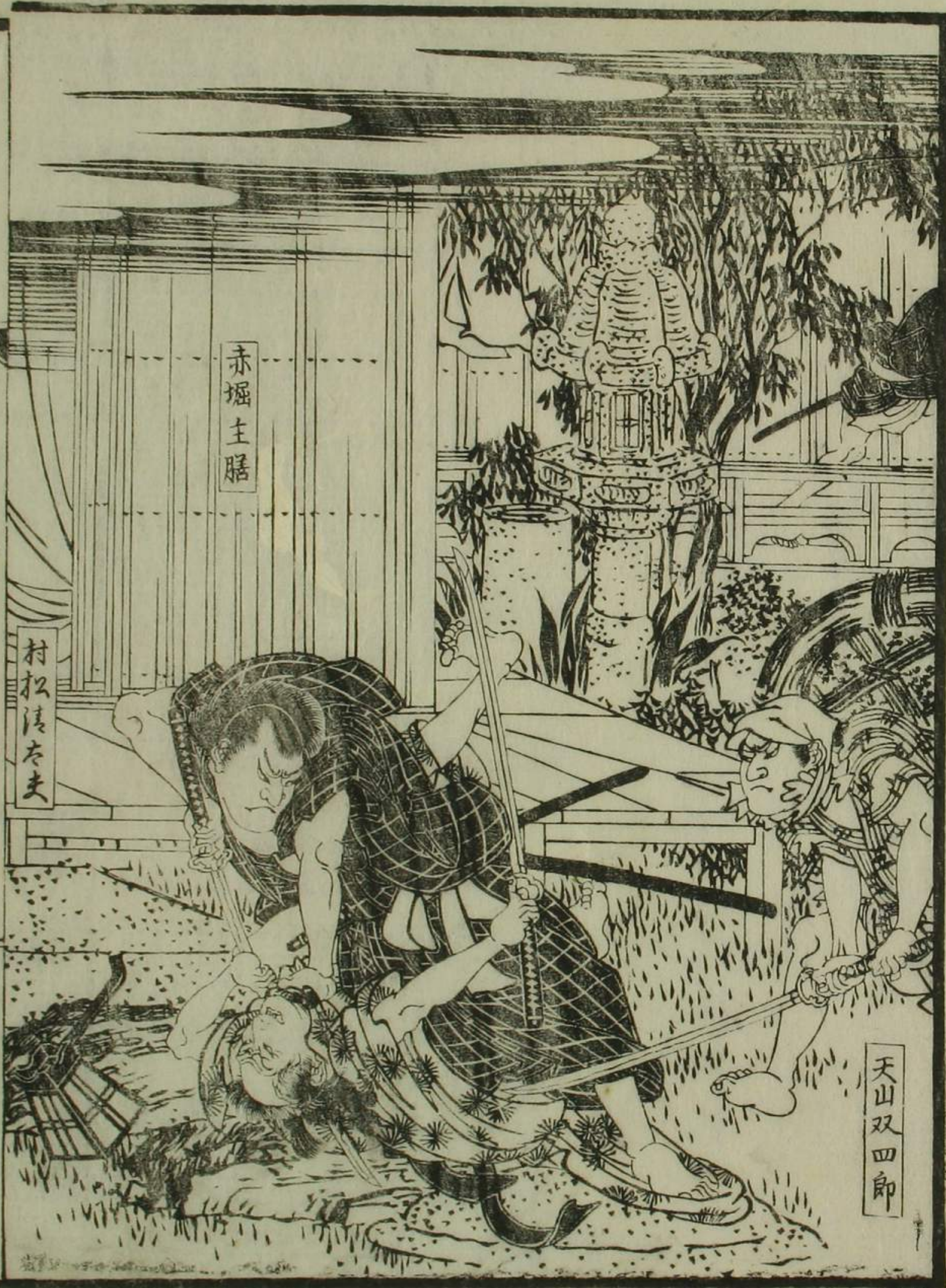
徳といいで釣れもろくそ作後一旦懈纏も又那村松蔭
 蔭も月小舟とて更閑に懈纏のまご様忘の下物も多
 くん保蔭の典よ酒と人量とささみび了得よ久しく端
 居して夜風と受るゝおろりと簷廊の涼よと宵まぬ茂蔭
 を独碇く碎ゆる程よ至と頻りに乞ふ細めりり漏纏を
 洋見よ對ひ那処の一室に村松主と家外傳の役せよ繁
 交の老友とら話回て慰まんともよ洋見のまゝて獲く
 一個の竹女とわく那方よ展る卧褥二つよ一張の故帳を内
 して徳くと報まは一旦懈纏を卒中卧房よ横らひて得り
 ぬと僕して破麻一足を磨て起るは巨巾おも又あつて
 兵兵衛御さ不笑ふく樹の中へ術ら投けく入るり徳は

長く月よつきて庭樹も影を移そらるる夜半の鐘聲響く
 と湖村の响く時候と暮らりし一個の無人作らるる宅の牆と外
 より登路く時の念と起しそく潜中より庭の面より下之時
 しも那知るる庭席に登りて人の出来来塔に小雲時躊躇
 て小園方より窺うる扉戸閉く權廊のひも柄と秉く廁へ
 行くは是即別人よりは規款の材松と月照して程なる
 ともて目を注して是と念ひ赤垢天山の澤も盤小亮途さ
 樹柱の蔭も竊歩して潜入程く名が橋尾完をの伴
 と聲んと銀聲して約んとするは一廁の戸既と响して時
 ゆまが思ふは本澤く之成る茂蔭の徳と知るは澤も
 盤より之寄く監受と天山双田跳り出るる技撃に左の肩

と下と研らるるまで若と叫びも故に洞の物と撲地と
 抛るまは言盡の勢と少傷くまで追巡りて茂蔭を
 中刀 晃りと技撃し暫言う人面程心の赤垢天山們
 早怯と天野遠まは日園して時灰堂の聲と「小懲
 どもあつやと之せも終て時廣く遠中よ技で撃んとは
 ちる刃と潜る茂蔭の庭へ閃一闪と跳下り左右はありし
 一上一下とひ瓜錫を年光ゆまど了侍と声刀知結が刀
 法はく一陰練の光功小雲時を挑を發ふものうと踏く碎
 ころそがよよ神力の雁疾小掙と自由と侍らりしうが鞍の
 疾と轟りてゆく拍子盡しかきまる赤垢がすく滅の刃に
 魂消る必死の一撃痛まきとらるる材松茂蔭牙はは藉よの

入経も國ふ右あり朋又信ある意若人の人の付磨らまは
孔離の堂ふ屠らまて三魂六魄散と離まはぬ極り
却るぬ透り「程」桶底穴去の遠國歎と見も果をまはり
塵席お找まより一室ふ見中焼の影落瞳まの亘り所床
うらむしと面も掉れ殺て入海経の筒又漸く目瞠しに忽
ち茂彦が叫ぶよ夏も破るる乃よ赤坂天山と罵るる急
く強弱ぬ共扱いと終ると極方の口と合せて起るり悞
の齋と及揚つ茂彦が牙上流く思つうぞ空城を若
業の状く未まると全家に响く大智に叫びつ牙と起
さんともう海まきり葛り「元」をが殿と撃るる双の光りふ
眼暎くも海経の牙と海まきたるに小橋と捨合捷く款

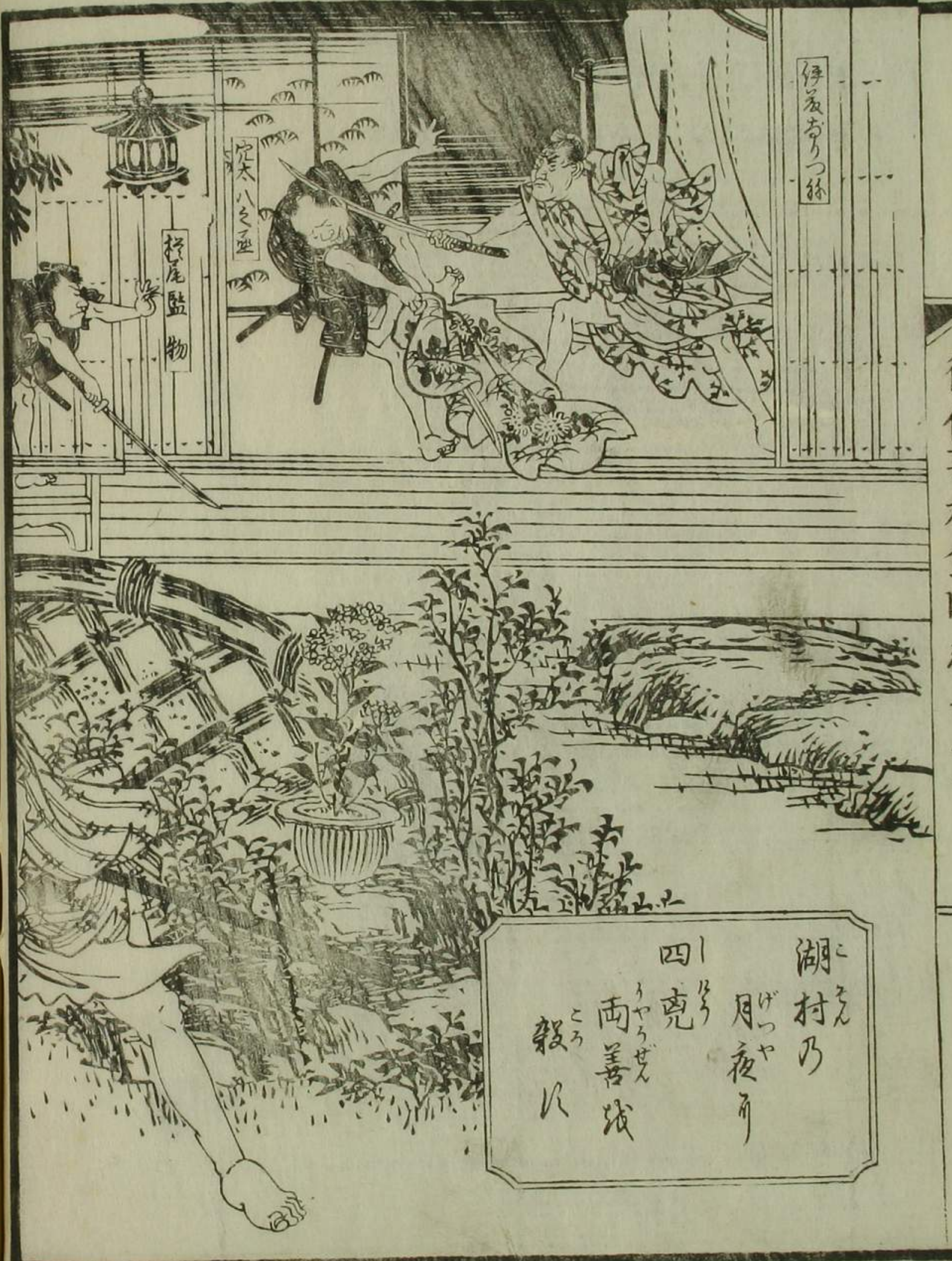
の白及小粒も被て抜もも尖く汝有と韓竹刻又研しり
双の脱味春まへ然しも名と海し海経が目覚しうりし
剛捷の車事ん必まぬ堅杓形成去の風烈く撃入るを村
松も甚磨みんと海経が心形りに息燦ども間もらまて
取合へし程もあうまに赤坂天山の桶底穴をよ力と副ん
と飛來つてお茂彦の好も道しよと狗塞りし海経の病御の
を色今尚不便あるよ款不西剣加るとるるとるよ
初曉撲地と陽仆しと一室の闇とあるをよと桶底の更
なる續く赤坂天山も喘くが同士將あはしと停在るがら
率ともおの响とるが夢と標ふ所看んとまよは後落る死
功者四個の款と敵送ふをと吞息と詰圖も眼と配る



赤堀主膳

村松清右衛門

天山双四郎



伊後おりつ絲

松尾監物

湖村乃
月夜
四
兩善
殺

まをむゆるまぬ次の男より筒へ淋經不吐記さし大坂岡
物寄山安平と鳴る兩個若黨と袖くして僕隸雜つあ
八九名揮棒決死ちんと傷くぞ得志器械と捲式ハ隻
にも燭と兼つを寄る圓脚安平遠知の光新刃るよりも
至の大率と刀と抜連前皆存く三人の魂と替んと
找むと天山赤堀們擊攘んと之湯まぐ桶底いまこま
滴纏と及と接へて挑くは烈くお向と答く客ふ
と歩ゆる洋人の心懸りるれを一個の僕ふを急を執
てより火員の准備と梅へける後座の壁火橋ふ登りて
急迫く撞と打傷し四下の人と集へんと是をうそ積くこ
個の奸徒中にも主従財廣を遠ぞ大率の臣らりと刀の

室ふ着る并抜奪て丁と替る鏡鏡ふ淋經が乳の下
浴く替る痛疾ふ疼むと急を執成を被く所外
廿の圓脚安平その他の僕隸們驚き怯きて無惑ふ間と
滑りと赤堀們空座あへきり出番び垣牆と跳越く暗
さ身も曇りさく月の照せる天が下廣くも狭くする
三個何れと取と交ねど西北と投てぞ無亡ぬ惜び
倅着淋經湖西ふ名と得し衣袋のふ瓶煉と三甲斐
遠ふるし脚中に纏る鬼の祟とこそ知るまこれ
凶音と傳く新猿養樹と原ふ
間謀と也く老奸極松と因ふ
却後坂中の人々の急撞の音不張と陸續ふ倅着が

宅小来り「に」（ついでに） 倭経が父子平野田安井安井紋を月
 十の長橋渡を所門と神めけ下なる者なきもく人
 より先は「能来り」が既小子倭経の養子と成りて
 仇の血まきくまきくも倭経が所領たる櫃越の死骸は徳
 ある元を汝有るる若者僕隸がりし而も楯尾堅初赤
 堀を信天山双田命ちるる物まきを使く輝けく
 野殺さんともあがり長橋平野安井全月們各同門の
 味方六名と衆令の郷人と軍隊一部一隊各二十人
 と率ひ軍隊小多きと馬と毛洋見の了得倭経が妻
 とて徳経の中にも従者あり又准後の七八張の角弓
 小券と金副の長隊の形は死傷あり亦材松主の内室

も子息も終る然るに妻に母はじく人各三個の冤氣と
 殺さんとも肩をき殺さるる勢を徳と生さるる捕へ取
 りてありまきと野経は四個小多き遠きまきと交合令
 門印出く北南西の山路の二條と素肉又たきく己が自
 徳経がくくに匠たるる良時後りありくた何処もあ
 往きも曉途と比及ふよと空くしてゆりたる徳が坂本
 一郷の人の存後が時よ母と交わり牙みと同くくぬに
 今宵別款の櫃越們と捕んとくくく郷曲の原
 徑より云くく倭経夫妻の人小懐ありくその怨はと
 けり由く人知るまきり徳り「経よ幸橋なる材松が泉
 ても洋見より疾け由と報せくく長にが哭くいつや更

たり園家の悲傷えんくは「たむし」て茂蔭が亡骸と其
敷の中に至りゆりぬ長江の家監公物と係り親善寺の
城下ふ在り清三郎茂樹小澤の中を報きくたも返え
とて二名の急使とせらせ又都へ上り「実他とも吸んと
さるる彼け澤の多うまび天明の時候小澤く使とせりに
より初と作着村松友家の終元をいもでも知る事成
べ縁さぬても多くれむ着安直く精一ぬぐ一不路松松
光朝を本日十四九多九府が難兵小擁まきて後家家の
同任歴より列に三好日向吉長縁歴不き情由と信同
に光朝世も阿容より多きなく頼末祥小流終まの長縁打
燕路向小子控屍の使とせりゆりぬらぐ徳とつる執りぬ

主被疾一名を便輿又載く修一末ま令いりり
るが被疾の口牒如命が中旨より符合さの仔細は「替く遠
に担くさる長」と座と起り夥兵們を光朝と引く屍の側成
一室ふ入りの敷く發固ぬ信る已牌の以及長縁再び
光朝と履ふ引出「如命が言りく金三捨人足野三六く中らん
を咽とも傷くもて既ふ死果をり統とてみりる旨あれば
控屍の吏們屍と昇せゆり」と香着にその痕全く痕らん
どの嚙傷けしうそそ履お名の屍も御彼は多く喰ひま
をり也信まが蕃山らるまども血腥と慕ひ「旅のあゆて
疾のゆりよ強も喰も果さく法」あらんこの粟田の里長
が等閑うして中戸人附措ざり」さるるまむれく「法責懲に

だしその丈あつのたもあまは侍人しやくじんと共いっしょにぬまはば柳やなぎが庁へん言ごんをん
 疑獄ぎごくとひまをへんとして凡多ばんた多た九く房ぼうふ下げ知ちと侍しやくくして極ごく
 松まつふ是ぜい非ひと言いふ友あつ舎しやへこそ幽ゆうきり遠とほ是これ別べつに石いし留りゅうあり
 三さん好こうが三さん先せん希きは故こ後ご長ちやう慶けいが極ごく信しん松まつ水すゐ強きやう正せい久きう秀しゆ們めん
 角かくは主しゆ君くん長ちやう慶けいが老らう病びやうこそ降かみと世よは忍しの一いつ長ちやう慶けいが執しやく
 とせし義ぎ建けんの尚しやう年ねん弱じやくとを後ごこそお軍ぐん義ぎ輝き郷きやうと害がいし
 せり執しやく送そうの名なと主しゆ家けは送そうしお軍ぐんの山さん牙がの周しゆ高かうとて僧そう
 一いつ麻ま園えん寺じに山さん度どをを膝かみと殺ころし又また南なん都と一いつ案あん院いんの門もん
 主しゆこそ山さん度どせし一いつ豊とよ慶けいともし先せんと世よは又また山さん利りくも道みちまあは
 せの若わか狭せう殺ころおに流りゅう寓いんあひ送そう信しん三さん好こう松まつ水すゐと討うちも滅めつさんと
 東とう國こくらる雄ゆう武ぶの大だいおは流りゅう一いつ義ぎ興きやうと揚あんと思おもしうら流りゅうの

送そう業ごう們めんの心こころ安やすうらぬおちるまの今いま先せん松まつと備ひ東とう國こく法ほふ度どの足あし
 謀ぼう見みもあらんうと疑ぎふ修しゆは修しゆく小こ心しん志しとらちまは修しゆは修しゆは光くわう
 松まつが牙がの厄やくは事こと不ふ解げくもあらざりしに法ほふ朝ちやうふ不ふを道みちもゆり
 こまをよそりは回かへひまご説せつと謁てつさぬとお回かへ特とくは長ちやう流りゅうはて
 既すでは措そ敷しの限かぎりとそせり早はや竟せう極ごく松まつが疑ぎ獄ごくと子こく免めんは
 理由りゆうゆと知ちましく疑ぎとひ眞まことしく次つぎの巻まきと関せきへし

繪本復讐言英雄録卷之四終

